

## 戦史叢書『陸軍航空兵器の開発・生産・補給』の執筆について

元戦史編さん官 名和田 雄

### 1 「戦史叢書」担当事項

本書は共同執筆で、名和田が開発を、調査員・高瀬七郎氏（陸士48期）が生産・補給を執筆した。

### 2 「戦史叢書」編さん当時の思い出

#### (1) 組織・規模

私が着任した昭和46(1971)年7月21日当時の戦史室長は島貫武治氏（陸士36期）、航空班長は松田正雄氏（陸士41期）で、航空班長の指導の下に編さんを行った。

着任した日に、航空班長から今後やるべき仕事について説明を受けた。即ち、陸軍航空の創始時代から終戦に至る間における技術研究、審査、制式決定、生産、補給、機種改変の状況を、陸軍中央部を中心に既述するものであった。頁数は500頁位にまとめ、刊行予定は昭和49(1974)年6月であった。

#### (2) 失敗談、成功談、苦労談

##### a 失敗談

この編さんに際して、失敗の最たるものは、審議途中において削除された事項の多かったことで、次の事項の削除が要求された。

- ・既刊の「戦史叢書」と異なる記述
- ・社会的、政治的に問題となるような事項の記述
- ・陸軍にとって不名誉な事項の記述

## b 成功談

一方、成功であったと思うのは、航空班長の目次構成の指導で、初心者が何とか執筆出来たのは、そのお陰であった。

航空班長は、初期段階から目次構成（篇、章、節、項）を指導され、また一頁に原則として小見出しを付するように指導された。通史の執筆には、構成の良否が大いに影響するもので、如何に内容が優れていても構成に難があっては、読者の理解は困難になってしまう。特に、小見出しを適当に付することは記述者の思想を端的に示すもので、読者にも読む際の印象を残すものと思う。

## c 苦勞談

着任して間もない頃の感想だが、開発、生産、補給関係については、既刊の地域戦史の随所に記載されていることであり、特別に一冊を設けることの必要性に疑問を抱き、骨を折る割合には報いられる処が少ないような気がした。しかし、研究が進むにつれて、本書の重要性、必要性を痛感するようになった。

## d 今後、戦史編さんを行う場合の提言

これまで戦史に全く無縁であった者が編さん官を命ぜられて、大変苦勞したように思う。今後、戦史編さんを行う場合、編さん官には幹部学校等で戦史教育を担当した者等を任命するのが適當と思う。

## 3 戦史部への期待

「戦史叢書」の編さんを終った後、『朝雲新聞』の「大東亜戦争 戦史余話」及び『郷友』の「戦史物語」への執筆勧誘があつて、相当の期間投稿した。執筆の間多くの方々にインタビューして色々な話を聞いたが、叢書には書けないエピソード等を改めて紹介する機会を与えられたことは幸運であつた。書いたものが部外の人目に触れることは、自信を与えてくれるので、戦史部においても多くの寄稿が適切に行われることを希望する。

また、航空戦史の教育及び研究の発展を図るためには、戦史教官室と戦史部とが意思を疎通し合い、協力し合う以外に方法は無いと痛感する。